

# 人間的自然における神的なものの内在

川崎医療短期大学 一般教養

佐々木 寛治

(平成5年10月20日受理)

Von der Einwohnung des Göttlichen  
in der Menschlichen Natur

**Kanji SASAKI**

*Department of General Education,  
Kawasaki College of Allied Health Professions,  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Received on October 20, 1993)*

## 概 要

シュレーラーNr.80の前半でヘーゲルは「神がイエスのうちにおられたこと、イエスが人間たちのうちに住んでおられること」「御父の御子における、御子のその弟子たちにおける現実的内在」を信ずることを要求する。シュレーラーNr.81では彼は神的なものの直観は直観者の内に神的なものを産むというテーゼを掲げる。彼はまた、神的言葉は聞く者がふさわしい限りにおいてその者の内に根付くという。拙論はシュレーラーNr.81におけるたとえ話論を準備する限りにおける、青年ヘーゲルの神性内在論を追跡する。

## Resümee

In der erste Hälfte des Schüler Nr. 80 fordert Hegel den Glauben, daß Gott in Jesus war, daß er in Menschen wohnt, — den Glauben an das wirkliche Einwohnen des Vaters im Sohn und des Sohnes in seinen Schülern. Im Nr. 81 setzt er eine These, daß das Anschauung des Göttlichen in den Anschauenden dieses Göttliche gebärt. Er versichert auch das Anschlagen eines göttlichen Wortes in die würdige Gemüter. Hier verfolgen wir die Gedanken jungen Hegels über die Einwohnung des Göttlichen, insofern sie seine Lehre über Parabeln in „D. Geschichte“ vorbereiten.

## 序

『キリスト教の精神とその運命』の準備草稿のひとつであるシュレーラーNr.80（以下『腹案』と呼ぶ）のなかにわれわれはひとつの断層を認めている。「神は愛であり、愛が神である」と高調する位層と、「しかし愛そのものは感情であり、愛と反省は合一されない」と省みる位層のちがいがそれである。この違いの性格は考察の角度により様々でありうるが、われわれはいま前者を、〈神国論をさしあたり括弧に入れて山上の垂訓を思索の焦点に据えた地平から神の理解を展望していく次元〉と解することにする。後者は〈いよいよ神国論の展開に着手して永遠と時間との関連についての差し迫った問いに駆り立てられつつ（「世界」）

宗教を論ずる次元〉となる。本稿は前者の位層に見られる宗教の輪郭を明確化し、そこから「神性内在論」を取り出すこと、さらにこれの継承の諸様態の一端をシューラー-Nr.81, Nr.83, Nr.89（以下それぞれ『素案』、『初稿』、『改稿』と呼ぶ）にわたって追跡し、もって『素案』「D, 歴史」における「たとえ話論」をヘーゲルが準備する経緯を解明することを課題とする。

### (1) 「宗教 I」

『腹案』の序論部が終わるや直ちにヘーゲルは、「ユダヤ教の根基をなすものは客体的なものである。つまりひとつの疎遠なものに対する礼拝、隷属がこれである。この点をイエスは攻撃した」と書き始め、山上の垂訓についての自らの理解の核心を要約している。そこから自らの宗教への構想を遙かに思いやるように、「様々な観点における主体的なものの高揚——ひとつの美しい宗教を創始すること。その理想は？ それが見つかるだろうか？」と書き留めている（[49v.a] K 30, W 1 298f.）。この自問に対するひとまずの解答が次のように提出されている。われわれはこれを仮に「宗教 I」と名付けておく。

何故なら全体は、たとえそれが引き裂かれていようとも、常に現在しているに違いないからである *das Ganze, obzwar getrennt, muß immer daseyn*。——神は愛であり、愛が神である。愛以外にいかなる神性も存在しない。——神的でないもの、愛することをしないもののみが神性を理念の内に、自分の外に、持たざるをえないのだ。神がイエスのうちにおられたということ、イエスが人間たちのうちに住んでおられるということ *daß Gott in Jesus war, daß er in Menschen wohne*, このことを信じられない者は人間を蔑視する者である。人間たちのあいだに愛が住まい神が住まうなら *Wohnt die Liebe, wohnt Gott unter den Menschen*, 神々がありうる。そうでないところ [人間のうちに愛, 神が住まうことが信じられないところ] では、単数の神が語られざるをえず、複数の神々は不可能である。 [57r.a] (K 38, W1 304f.)

みられるようにこれは人間の内への神と愛の内在の断言、主張である。ヘーゲルは贖罪の死の思想は「人間蔑視」「人間墮落命題」（Vgl. GW 1 156）に根ざすとみなすが、上の主張はこの思想に対する抗議である。神、イエス、信徒たちの関係についてのヘーゲルの主張をもう少し詳しく調べてみよう。道徳性から宗教を分離していこうとする問題意識を暗示するように、彼は次のように記している。

マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝ではキリストはユダヤ人への対立においてより多く [語られており]、道徳がより多く [語られている]。ヨハネ伝ではより多くキリスト自身が、より多く宗教的内容のキリストが *mehr er selbst, mehr religiösen Inhalts*, 神や自分の信徒たちに対するキリストの関係 *Beziehung*, 御父とのキリストの統一、だからまたキリストの弟子たちがキリストとも自分たち自身の間でもひとつとなる定めにある *eins sein sollen* ということ、——キリストが中心であり頭であるということ [が語られている]。比較的多くの人間たちの合一にあってはそれがどんなに生き生きとした合一であっても相変わらず分離が生ずるように、上のような合一においてもまた [分離が

生じる]。——これが人間性の定めである。[しかしこの現実に対し]まだなお引き裂かれているものが理想においては完璧に合一される，ギリシャ人たちは民族の神々において，キリスト教徒たちはキリストにおいて。

[54r.a] (K 32, W1 302)

このようにキリストを「宗教的内容」において語るということは当時のヘーゲルにとってはとりもなおさず，キリストを「諸個人結合の理想」として語るということを意味していたのである。そしてヘーゲルは明らかに諸個人の結合の次第を御父と御子の関係という垂直軸，イエスと教団という水平軸，この二つの軸の関連において語っているが，当然のことながらそれは永遠の生命（いのち），聖なる愛の由来を見据えてのことである。

なお最初の引用文には「理念 die Idee」という術語が，次の引用文には「理想 das Ideal」という術語が使用されている。このように対比される場合，前者は受動的個人を領導する「行為の客体」，後者は意志主体としての個人を領導するそれであるが，前者は本源的自然としての衝動に根ざす個人の内部に存在する「反省された衝動ないし客体としての衝動」ではなく，受動化された人間から疎外されこのものを外在的客体的に支配する観念である。これに反し後者は意志の主体たる人間が自身に対して反省的に定立する，「自身の内に基礎づけられた」客体，「反省された活動性」である（Vgl. W 1 300f., auch 239f.）。自然としての衝動，意志ということ的前提にして，人間の神的なもの由来が次のように語られている。

人間自身が意志を持つとなれば，彼はたんなる受動的な態度とは異なる態度をもって神に対していることになる。独立した[何ものにも依存することのない]意志が二つ在るはずもなければ実体が二つ在るわけでもない。だから神と人間とはひとつでなければならぬ zwei unabhängige Willen, zwei Substanzen gibt es nicht; Gott und der Mensch müssen also eins sein。——しかし人間は子であり，神は父である。人間は独立し自分自身に立脚しているのではなく，人間が存在するのもしばら，人間が反定立されているものであり様態でありこうして実に父が彼のうちに存在する限りにおいてでしかない。[イエスという，現実の]この御子のうちに彼の弟子たちが存在する。また彼らは御子とひとつである。これぞ現実の実体変化 eine wirkliche Transsubstantiation であり，御父の御子における，御子のその弟子たちにおける現実の内在 ein wirkliches Einwohnen である。——これらすべては個々の実体であるのではない，つまり端的に互いに切り離されていて普遍的な概念においてのみ合一されているにすぎないものであるのではない。そうではなくてぶどうの木とその実のようなものである。それらのうちには神性の脈打つ生命がある。

[56r.a - 56v.a] (K 36ff. W1 304)

ここで術語「内在 Einwohnen」が強調されているが，それはもちろん，カントの『たんなる理性の限界内における宗教』の第一篇の表題「善の原理とならんで悪の原理が内在することについて，もしくは人間本性のうちなる根本悪について Von der Einwohnung der bösen Prinzips・・・」を強烈に意識してのことに違いない。うえに要約してきた「宗教I」が「神国論」への移行の準備でもあるからにはなおさらのことである。

ヘーゲルの傍らにはヨハネとともにスピノザが立っている。「神性の脈打つ生命」としての生命樹が唯一実体である。人間は「意志を持つ」ことを条件とし、その限りで自らが根ざす母胎、この生命樹という<生きた全体>を意識する（自身がその部分として内属するその当体として）。主体がこの<生きた全体>の意識に明るんだ事態が神的なものの「現実の内在」の、その<現実性>であろう。冒頭引用文の最初の確言、「何故なら全体は、たとえそれが引き裂かれていようとも、常に現在しているに違いないからである。——神は愛であり、愛が神である。愛以外にいかなる神性も存在しない」は、<生きた全体>の「現在 Daseyn」への確信からする愛なる神への賛美、この<現実性>の表現、であろう。

自己をその部分とする生きた全体の意識、こういうものとしての自己認識は「運命論」の『腹案』ヴァージョンでただちに深化されている。この<全体>は最初から愛として主体に向かい立つとは限らない。しかもあくまでもわたし自身の所行の帰結としてそれは現れる。

一見疎遠に見える生命であってもわたしが所行をもってそれを毀損した限りにおいて、その限りで私は自分自身の生命を毀損したのである。生命は生命として生命と相違しはしない。毀損された生命は運命としてわたしに向かい立つのである。 [58r.] (K 39, W1 305)

しかもわたしに向かい立つこの運命はわたしをそのうちに含むあの<全体>である。

運命は自己自身の（行為でなく）意識である。自己自身のという意味はひとつの全体としてということである。この全体の意識が反省され客体化されている[のが運命である]。この全体は自らを毀損した生けるもの[生きた全体、生命体]であるから、それは再びその生命へと、愛へと還帰することができる。自分を意識することが再び自己自身への信頼となる。自己自身の直観は別の直観になったのであり、運命は和解されているのである。 [58v.] (K 40, W1 306)

この意味で全体の認識が、その全体のうちへの主体の救済、新たな生命の創出なのである。この論点は『初稿』に次のように継承される

彼らの愛の共同体は何か神的なものであり、生きてはいたが形象もなく形態もなかった。復活したものの、天へと挙げられたものの中に神的なものは自らをひとつの形態のうちに示現したのである *stellte sich das Göttliche in einer Gestalt dar*。精神と物体は結婚し、ひとつの神のうちで合一したのである。神のうちでは相異なるものたちは互いに愛し合いひとつである。イエスの形象は再び、[しかし今度は] 不滅の生命を得たのであり、彼らの愛は彼のうちに形象と中心点を見いだしたのである。こうして彼らは宗教を持つに至っている。彼らの宗教はこの復活したイエスのうえに安らぎ、この形態化した愛のうちに憩う。 [120r.a] (K 84, Vgl. W1 408)

## (2) 山上の垂訓から神国論への移行

ところで『腹案』で「A 儀式」が始まる直前には、ここまでの論述を終結するかのようにして

前者〔御父〕は一なるもの、分かたれざるもの——美なるもの——後者〔御子〕は変様されたもの——人ノ子は合一性から発出した herausgegangen のである。その故に彼は全権を持つ——敵対するもの、向かい立ってくるものに対して——裁く全権を。〔それは〕彼に背く者たちに対するひとつの律法である。——自由と現実態の国〔との関係においてこの律法を考えるべきである〕

[61r.a] (K 41, W1 307)

という神の国をめぐるまとまった記述がはじめて見られる。ここでは天国とか神の国とかの術語が意識的に控えられていることに注目されたい。テキストのここまではマタイ伝4,17への言及はないし、うえの術語は（メモ的挿入を除いては）登場しない。

マタイ伝4,17に言及し始めたとき、ヘーゲルは興味深いメモを繰り返している。

マタイ伝4,17 「悔い改メヨ、天国ハ近ヅイタ」——これが最初の呼びかけ——そして確言、天国が現在するとの *Dies ist der erste Aufruf—und Versicherung, das Himmelreich sey da*。——そして彼の宣伝えと癒しの結果は多くの信徒たち

[64r.a] (K 43, W1 309)

イエスは、神の国が現在していると告げ知らせることをもってその宣教を開始した *Jesus fing seine Predict damit an, zu verkündigen das Reich Gottes sey da*。ユダヤ人たちは神政の復活を期待した。彼らは神の国が現在することを信じるべきであったろう。そうすれば神の国は信仰において現在することができる。信仰のうちにあるもの *was im Glauben vorhanden* は日常的現実とその概念とに対立する。

[67v.a] (K 46, W1 311)

彼は神の国が現在すると確言した、ある事柄の現在を言明すること *Er versicherte, das Reich Gottes sey da, das Daseyn einer Sache aussprechen*

[67v.a] (K 46, W1 312)

そのようなユダヤ人が神の国が現在しているということをイエスから告げ知らされても、そんなことは信じることはできなかった。しかしながら自分自身のうちで基礎付けをえて、自分自身のうちで完成されていた人々はそのことを信ずることができた。しかも神の国の現在を隔絶したものとしてでなく信ずることができた。何故なら神は隔絶したもののうちにはなく、生き生きとした共同関係の中にあるからである。

[67v.a] (K 47, W1 312)

ヘーゲルが狭い紙面の中で繰り返し繰り返し模索している内容は明らかに神的語りとこれを信じることにおける存在定立の問題である。これは『改稿』でのヨハネ伝冒頭の解釈へと引き継がれる。のみならずうえの模索の中におそらくはイエナ期ヘーゲルのカテゴリー論が懐胎されたのであろうことも想像されうる。

「宗教 I」においては存在とは生命あるもの（全体としての生命）の合一性に他ならなかった。しかし神国論の叙述はイエスたちと世との闘い、両者の対立を前提する。存在への問いは切迫している。彼は言葉のもつ存在定立の力という方向に突破口を見いだそうとしているかに見える。しかもイエスの aussprechen したものを信仰において auffassen する、その交わりのうちに das Daseyn が現出するというふうに。

### (3) シューラー Nr. 81の神性内在論

シューラー Nr. 81（われわれはこれを『素案』と呼ぶ）は「B. 道德」「zu C. 宗教によせて」「D. 歴史」の三部で成り立っていて、この最後の項「D. 歴史」の冒頭は次のように「歴史」の定義で始まっている。

D. 歴史——個人としてのイエスが諸個人に対して、そして諸個人がイエスに対して立つ形式、彼の教えの伝播 Ausbreitung seiner Lehre (K 50, W1 315)

われわれはうえで確認した「宗教 I」の「水平軸」をこの歴史の定義の前半に重ね、「垂直軸」を定義の後半と結んで考えてみることができよう。ところでヘーゲルは『腹案』で「神国論」をはじめて論じたとき次のように記していた。

愛は生命の花 [実を結ぶ花]、神の国はその木全体、これには [生命の] 展開の全ての必然的な諸様態、諸段階が含まれる。[・・・]あらゆる関係は生命の展開からいきいきと発出した

[63r.a] (K 42, W1 308)

これは「宗教 I」でみた<生きた全体>の延長上にある。「歴史」の定義としての「イエスの教えの伝播」とは——たんなる宣教師ではあり得ない以上——世との闘いの中で神の国が地上に根を張ることそのことであろうが、そのことの可能性はどういう方向に見い出すことができるのだろうか。

「zu C. 宗教によせて」

永遠が時間の内にどのようにして根付くことができるのか、その核心点を探り当てて「D. 歴史」の叙述を準備するため、しかもそれだけのために「zu C. 宗教によせて」が書かれたように見える。「C.」でなく「zu C.」となっているのはそのためだろう。

この項目の下にヘーゲルが設定している議論の枠組みは「宗教 I」の垂直軸と水平軸である。父・子関係における神の発出、イエス・教団関係における生命と愛の波及、これをたんなる客体的な流出としてではなく主体の契機を含んだものとして把握すること、しかも認識において人間主体が神的生命を迎え入れこれが自分のうちに生みつけられるという方向で把

握ることがこの枠組みの焦点である。ヘーゲルはそのことをマタイ伝18,10（「彼らの御使たちは天にあって、天にいます父のみ顔をいつも仰いでいるのである」）および18,19（「[あなたがたの] 二人があることについて心を合わせ、あなたがたがそれについて願っているなら、父がそれをかなえて下さるだろう」）に依拠し、かつ兩者をつなぐという形で論じている。彼は幼子たちとその御使たちというイエスの方式と想起説としてのプラトンの方式とを比較したりしているが、その確信の根幹になるものはエックハルトの思索圏の近くにあるように思われる。

直観されるものに対する直観するものの対立、主観と客観というふうに両者が対立するということが、これは直観そのものにおいては消滅している。——両者の相違は互いに分離する可能性がたんにあるということではしかない。[垂直軸で] 太陽をいつも見つめている人間がいるとすれば、彼は光の感覚、あるいは実在の感覚だけになることだろう。[水平軸で] 一人の他者を見つめることに全く没入して生きている人間がいるとすれば、彼はこの他者そのものになり、[この他者とは] 別様であり得る可能性をたんに持つのみであろう。「人ノ子ハ滅ビル者ヲ救ウタメニキタノデアル」[18-11] という文言がここにあるからには、この[垂直軸での、幼な子の精神が神の直観において神的なものとなるという] ことと結び合わされているのは、[水平軸での] 互いに和解し、分裂を放棄し、ひとつのものとなれ *einig zu werden* という掟である。この合一性 *Einigkeit*こそ神の直観、幼な子のごとくなること *das Anschauen Gottes, das Werden wie Kinder*, である。

[70v.a] (K 50, W1 314f.)

ここにひとつのテーゼが確立された。そのテーゼとはいふまでもなく、精神的対象の認識は認識者のうちにこの対象と同一の現実態を生み出すということ、これである。語られた言葉はこれを受け入れるものの中に、永遠なるものの生起として現実に育ち始める。このテーゼをもってヘーゲルは「D. 歴史」の叙述にはいるのである。

## 使徒派遣と言葉

うへの準備を受け「D. 歴史」の論述が始まるが、その頂点であるたとえ話論（その冒頭で、あの歴史の定義が繰り返されている——たとえ話 *Parabeln* マタイ伝13章。[これを考察することは] イエスの教えの伝播の仕方やその運命について [考察することである]）に入る前にヘーゲルがどうしても書き記しておきたかったことがある。それは言葉が精神的な現実として「根付く」ということ、直観の内容が現実となるという論点である。彼はそれを使徒派遣（むしろ言葉の派遣というべきであろうか）をめぐって書き留めている。「D. 歴史」に記述されている内容の構成は上に示した通りであるが、この種のメモ書きは『腹案』後半「C 神性」にもみられる。兩者を比べて歴然としていることは使徒派遣をめぐる議論の割合が前者で圧倒的に多いということ、しかも使徒派遣の意味が「神の国」のための闘いであることは後者で意識的に語られているが前者ではその点が副次的にしか語られず、言葉とその理解の問題に論点が絞られているという点である。

もしその家がふさわしいならあなたがたの挨拶（の内容 *εἰρήνη* 平安）（イエスはあらかじめある家に挨拶するように命じていた）はその家にくるだろう。もしそうでなければそれはあなたがた自身のところへ帰ってくるだろう。——挨拶（の内容）はどちらの場合も同じである。その家のふさわしいかどうかによって、挨拶（の内容）が言葉としてその家に保持されるかどうか、あるいは挨拶を送る側が込めたのと同じ気持ちの充実がその家の人々の心に根付くかどうかが決まる *Es kommt auf die Würdigkeit des Hauses an, ob er als Wort [sich] in ihm erhält, oder dieselbe Fülle ihm in den Gemüthern anschlägt, mit der er gegeben ist. [ . . . ]* 預言者を預言者であるとして（名ノユエニ *εἰς ὄνομα προφήτου*）受け入れる *aufnehmen* 者、彼にとっては預言者は預言者である。——義人を義人であるとして、弟子を弟子であるとして受け入れる者、彼は報いを、預言者の価値を得る。人間は彼が人間を受持する *auffassen* が如く、まさにその如くに彼自身なるのである *Wie der Mensch den Menschen auffaßt, so ist er selbst.* [71v.a] (K 51, W 1 315)

人間が神の国を信ずることにおいて神の国は現在するというヘーゲルの論をわれわれはうそで見ておいた。ここでは言葉が根付くには言葉を受ける側がふさわしいかどうかの問題であるとされている。そして「名ノユエニ」人間が受け入れ受持する当のものに彼自身は成るのだと語られている。イエスの教えが「伝播する」とは、人間が変わることを介してそういう新しい現実が茂っていくこととして「歴史」なのであろう。

#### （４）愛餐論における神性内在論

略

#### 引用略記

- GW : G. W. F. Hegel *Gesammelte Werke* hrsg. von der Reinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften  
 W : G. W. F. Hegel *Werke in zwanzig Bänden* Suhrkamp  
 N : Hegels *theologische Jugendschriften* hrsg. von H. Nohl Tübingen 1907  
 U : G. W. F. Hegel, *Der Geist des Christentums, Schriften 1796 –1800* hrsg. von W. Hamacher Ullstein  
 K : 久保陽一 『初期ヘーゲル哲学研究』東京大学出版会 1993年  
 (久保氏のこの領域での一連の先駆的なご研究に多くを学ばせていただいたことを記して感謝する)

#### 用語検索

千葉大学文学部加藤尚武研究室開発ヘーゲル・データベース SK01.HEG, SK03.HEG  
 ならびに 検索システム TEXAS ver. 2.58 の恩恵を受けている。